

図説 日本
の古典

9

平家物語



図説日本の古典

第1巻／古事記	武蔵大 学教授	神田秀夫	奈良国立文化 財研究所長	坪井清足	学習院大 学教授	黛 弘道
第2巻／萬葉集	筑波大 学教授	伊藤 博	成城大 学教授	上原 和	学習院大 学教授	黛 弘道
第3巻／日本霊異記	琉球大 学教授	小島瓊禮	文化 庁	上原昭一	東京大 学助教	笹山晴生
第4巻／古今集・新古今集	東京大 学助教	久保田 淳	美術 史家	白畑よし	聖心女子 大学教授	目崎徳衛
第5巻／竹取物語・伊勢物語	大阪女子 大学教授	片桐洋一	大谷女子 大学教授	伊藤敏子	聖心女子 大学教授	目崎徳衛
第6巻／蜻蛉日記・枕草子	明治大 学教授	木村正中	美術 史家	白畑よし	東京大 学教授	土田直鎮
第7巻／源氏物語	東京大 学教授	秋山 虔	学習院大 学教授	秋山光和	東京大 学教授	土田直鎮
第8巻／今昔物語	早稲田大 学教授	国東文麿	美術 史家	梅津次郎	京都女子 大学教授	村井康彦
第9巻／平家物語	神戸大 学名誉教授	永積安明	大阪大 学教授	武田恒夫	京都大 学教授	上横手雅敬
第10巻／方丈記・徒然草	お茶の水女子 大学助教	三木紀人	東京国立文 化財研究所	宮 次男	東京大 学助教	益田 宗
第11巻／太平記	早稲田大 学教授	梶原正昭	東京国立文 化財研究所	宮 次男	京都大 学教授	上横手雅敬
第12巻／能・狂言	東京大 学教授	小山弘志	京都国立 博物館	切畑 健	大阪市立 大学	原田伴彦
第13巻／御伽草子	国文学研究 資料館長	市古貞次	美術 史家	高崎富士彦	東北大学 名誉教授	豊田 武
第14巻／芭蕉・蕪村	福岡大 学教授	白石悌三	文化 庁	佐々木丞平	前学習院 大学長	児玉幸多
第15巻／井原西鶴	埼玉大 学教授	長谷川 強	東京大学 名誉教授	山根有三	前学習院 大学長	児玉幸多
第16巻／近松門左衛門	学習院大 学教授	諏訪春雄	大阪大学 助教	信多純一	横浜市立 大学教授	辻 達也
第17巻／上田秋成	国文学研究 資料館教授	松田 修	名古屋大 学助教	河野元昭	学習院大 学教授	大石慎三郎
第18巻／京伝・一九・春水	早稲田大 学教授	神保五弥	東京国立 博物館	小林 忠	立正大 学教授	北原 進
第19巻／曲亭馬琴	明治大 学教授	水野 稔	国立国会 図書館	鈴木重三	東京学芸大 学助教	竹内 誠
第20巻／歌舞伎十八番	早稲田大 学教授	郡司正勝	東京国立 博物館	小林 忠	成城大 学教授	西山松之助

図説 日本の古典 9 平家物語

昭和54年11月20日 第1刷印刷

昭和54年12月9日 第1刷発行

著者代表——永積安明 ©1979

発行者——堀内末男

発行所——株式会社 集英社

東京都千代田区一ツ橋2-5-10

電話—販売部 東京(03)238-2781

出版部 東京(03)230-6351

振替—15653／郵便番号101

印刷所——大日本印刷株式会社

用紙——王子製紙株式会社

製本——中央精版印刷株式会社

文勇堂製本工業株式会社

製本には十分注意していますが、落丁・乱丁の際は
おとりかえいたします。

0391-167009-3041

Printed in Japan

〈企画委員〉

東京大学教授

国文学研究資料館長

前学習院大学長

早稲田大学教授

東京大学名誉教授

秋山 虔

市古貞次

児玉幸多

神保五弥

山根有三

〈第九巻・編集委員〉

神戸大学名誉教授

大阪大学教授

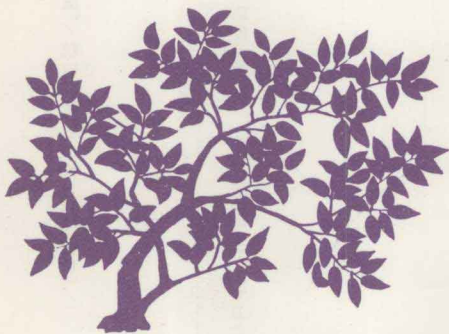
京都大学教授

永積安明

武田恒夫

上横手雅敬

平家物語



集英社

目次

●カラー図版●平清盛願文／玄奘三蔵絵巻／伝平清盛像／後白河法皇画像／源平合戦図屏風／秋の神護寺／伝源頼朝画像／東大寺大仏縁起／地獄草紙／平家絵扇面貼文屏風／壇浦

●図版特集●

源平遺品の美 稲田和彦

小校革黄返威鎧／赤糸威胴丸鎧／紺糸威鎧／赤糸威鎧／龍笛／七絃琴／籠手／塵地螺鈿飾太刀／錦包藤卷太刀／木地螺鈿飾太刀／太刀（銘友成作）／三島神社旒旗／源氏の旒旗

『平家物語』の世界 永積安明

『平家物語』の源流 『平家物語』の成立 『平家物語』の構想

●図版特集●

『平家納経』と厳島 武田恒夫

厳島景観／提婆達多品／彩絵繪扇／観音賢経／薬王菩薩本事品／平清盛・頼盛合筆経／平家納経の巻装／金銀荘雲電文銅製経箱

『平家物語』―作品紹介 永積安明

清盛の栄華 重盛の教訓 鬼界が島 源氏揃 都遷 入道死去 平家都落 太宰府落 木曾最期
重衡受戒 先帝身投 断絶平家 建礼門院往生

●図版特集●

平曲―その楽器と演奏 金田一春彦

『扇面法華経冊子』／『一遍聖絵』／『太平記絵巻』／東大本『平家正節』／竹生島／『慕婦絵』／『荻野検校画像』／琵琶「山路」／琵琶「葛城」／筑前盲僧琵琶／館山甲午／井野川幸次検校

平曲―その歴史と音楽 金田一春彦

平曲―その歴史と現状 語り物音楽としての平曲 平曲の伴奏楽器

平氏の台頭 上横手雅敬

桓武平氏の成立 院政と平氏

●図版特集●

平清盛の足跡 上横手雅敬

平清盛木像／祇園女御塚／忠盛燈籠／六波羅／保元・平治合戦図屏風／金剛力士立像／平治物語絵巻／三十三間堂内陣／厳島神社／華厳宗祖師絵伝／音戸の瀬戸／地獄草紙／清盛供養塔／十三重石塔

「諸行無常」——『平家物語』の思想 永積安明 132
『平家物語』の序章 無常の確認

建礼門院と祇王——女性たちの運命 山下宏明 140
平家の運命と建礼門院 祇王の運命

●図版特集●

浄土への願い 上横手雅敬 149

『阿弥陀三尊像』／『平重衡画像』／十三重石塔／『法然上人画像』／『平重盛画像』／『平家公達草紙繪卷』／『熊野曼荼羅』／山成島／
『普賢菩薩像』／『建礼門院画像』／『善導大師画像』／『六道絵』／『当麻曼荼羅繪起繪卷』

後白河法皇とその時代 上横手雅敬 156
権勢への途 武家との対決

源頼朝の生涯 上横手雅敬 164
頼朝の拳兵 鎌倉幕府の成立

●図版特集●

平家絵の構図 武田恒夫 173

『安徳天皇縁起繪図』／『橋合戦図屏風』／『宇治川・一の谷合戦図屏風』／『源平合戦図屏風』／『平家物語図屏風』／『平家物語画帖』

平家絵 武田恒夫 180
はじめに 平家絵——繪卷と扇面 主役のテーマ化 源平合戦

合戦図と合戦風俗図 武田恒夫 192
合戦図 合戦風俗図

平家伝説 永積安明 200
平家の敗走 南海の平家伝説

『平家物語』人物事典 山下宏明 210

『平家物語』年表 山下宏明 212

『平家物語』関係系図 上横手雅敬 214

『平家物語』関係地図 上横手雅敬 215

凡例

1 古典文学の珠玉の名作を立体的に構成した本シリーズでは、その内容をさらに意義づけるため、その部分の執筆者が各図版の解説にあたったが、それ以外の場合は、とくに解説の末尾に氏名を付記した。

2 本巻の仮名づかいは、原則として現代仮名づかいによった。古文の引用については、歴史的仮名づかいを原則としたが、必要に応じ原本通りとした部分もある。特殊な美術・歴史用語の引用などについては原本通りとした。

3 参考文献を各部分の章末に一括して注記し、読者の便をはかった。

4 各図版に添記した国宝・重文・史跡のうち、重文は重要文化財、史跡は国指定史跡の略である。なお、個人所蔵者名は略させていただいた。

5 本巻の図版写真および資料の収集にあたっては、その所蔵者・管理者・提供者・撮影者など、関係者各位のご好意とご協力を賜った。

〈第九巻・執筆者〉

京都大学教授

上横手雅敬

大阪大学教授

武田恒夫

京都国立博物館

稲田和彦

神戸大学名誉教授

永積安明

上智大学教授

金田一春彦

名古屋大学教授

山下宏明

〈装幀〉

後藤市三

〈レイアウト〉

宇喜多邦嘉

樋口英男

弟子清盛敬白夫以頻繁風
 芳自混於陀利華之露黃
 汚水絮遂歸隆婆若海之
 波和光同塵不具然乎伏惟
 安藝國伊都伎嶋大明神名
 載常篇禮存恒典一區據孤
 洲之巖薛四面臨巨海之渺茫
 謂其靈勝則如雲蓬露葉之
 在乾坤之外謂其締構之省全
 殿玉樓之排混闌之間凡厥靈
 驗威神言語道斷者也於是
 弟子本有目緣專致欽仰利

華之衷證中道未晚先利
 物於舊栖素梓之町能至善
 提引導法界今日之願旨
 趣如斯乃至福業所覃迴施
 不限敬白

長寛二年九月 日榮德經繼德經清盛

弟子清盛敬白、夫以、頻繁風
 芳、自混、於陀利華之露、汚
 汚水絮、遂歸、薩婆若海之
 波、和光同塵、不具然乎、伏惟、
 安藝國伊都伎嶋大明神、名
 載常篇、禮存恒典、一區據孤
 洲之巖薛、四面臨巨海之渺茫。

(以下略)

(巻末 三行目六字より)

今日之願、旨

趣如斯。乃至福業所覃、廻施
 不限。敬白

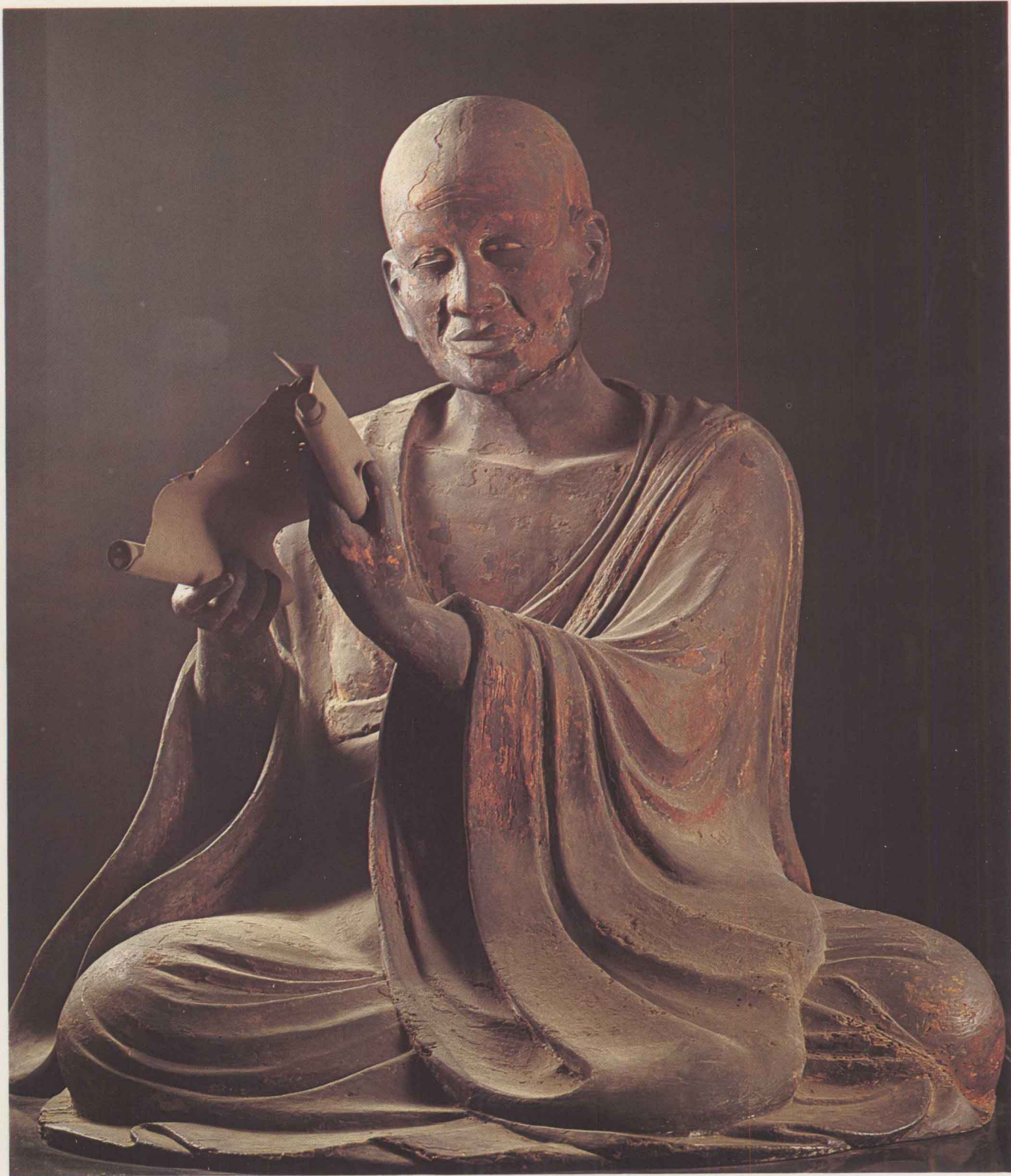
長寛二年九月 日 弟子清盛二行目續中納言兼右大

1 平清盛願文——平清盛は厳島神社をあつく信仰し、平氏の守護神として崇めた。仁安3年(1168)ごろ、清盛の援助で社殿の大修造がおこなわれたが、それより先、長寛2年(1164)には、華麗ないわゆる『平家納経』が奉納された。本図は納経の際、清盛が願意を述べた願文であり、一門32人が法華経などの經典を1巻ずつ分担、書写し、金銅の箱に入れて厳島の宝殿に安置する旨を記している。巻頭(A図)と巻末(B図)の各部分。平安時代。縦27.3cm/広島県・厳島神社





2 祇園精舎『玄奘三蔵絵巻』部分——祇園精舎(ぎおんしょうじゃ)の鐘の聲、諸行無常の響あり——『平家物語』の冒頭の一句は、栄枯盛衰の世の姿を端的に告げるものとして知られている。玄奘(げんじょう)三蔵法師が、インド舍衛(しゃえ)国の都城に近いこの精舎をたずねた時も、それはすでに廃墟と化していた。本図は、14世紀初頭、絵所系絵師のイメージでとらえられた、荒れて静かな祇園精舎である。卷子12巻のうち。鎌倉末期。紙本着色。縦40.5cm／大阪府・藤田美術館



4 『後白河法皇画像』—— 後白河法皇(1127～92)は、即位の翌年に保元の乱が起こるという劇的な時代人であった。その後30数年におよぶ長期間院政の座にあり、平家の台頭、全盛、没落に接したばかりでなく、その変転にも終始かわりをもった重要な存在である。本図は、英邁(えいまい)な風貌を伝える等身大の法体像であるが、画面の損傷著しいのがおしまれる。1幅。鎌倉時代。絹本着色。縦134.0cm 横84.5cm／京都府・妙法院

3 伝平清盛像—— 経巻を手にしたこの僧形像は、清盛像と伝えられてきた。武将像が僧形であるのは珍しいが、そのすどい眼光は、「猛き者」清盛の風貌をよく写しているといえる。この像を所蔵する六波羅蜜寺は、平氏の本拠六波羅にあり、清盛の邸は寺の西にあったという。境内には清盛の供養塔も残っている。平氏は清盛の祖父正盛以来、この寺と関係を持っていたようである。鎌倉時代。像高85.0cm／京都府・六波羅蜜寺



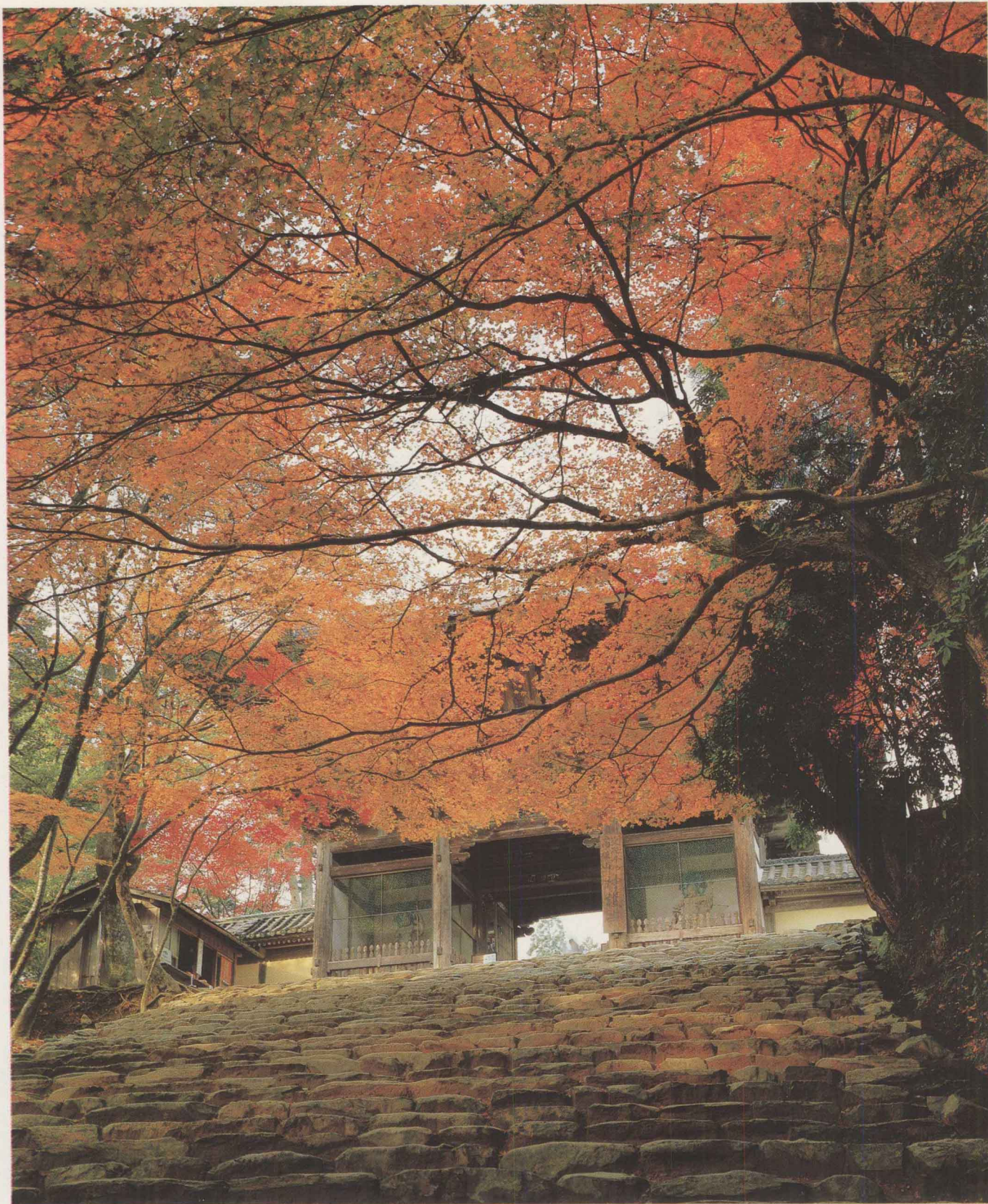


5 『源平合戦図屏風』——源平合戦図は、近世に入るときわだった盛行ぶりを示しはじめる。武家層の趣好がこれを支持したことが、その主たる動因といえる。瀬戸内海を中央に配して、右半双に一の谷合戦(A図)、左半双に屋島合戦(B図)を展開させるのが定型となっている。本図も、漢画系の絵師の手になる堂々たる作風を示し、諸人物も比較的大きくとらえ、いかにも大名所持にふさわしい趣がそなえられている。江戸初期。6曲1双。紙本金地着色。縦168.5cm 横372.0cm/東京都・永青文庫



5-B





6 秋の神護寺——文覚(もんがく)がはじめて神護寺を訪れたのは、仁安3年(1168)のことであった。『平家物語』は、そのころの寺の荒廃ぶりをつぶさに伝えている。文覚は神護寺再興を後白河法皇に強要して、伊豆に流されてしまう。しかし、それが機縁となって、流謫

(るたく)の境涯にあった頼朝に、平家討伐をすすめたというのが、物語の筋である。文覚の努力は、やがてむくいられて、寺観は整えられるにいった。かつて神護寺には後白河法皇の像があったといわれ、現在も頼朝像や文覚像が残されている。京都市右京区梅ヶ畑高雄町。



7 『伝源頼朝画像』—— 源頼朝(1147～99)は平治の乱以来、平家打倒の志を貫徹した。その間、一族の木曾義仲、その後は弟の義経、さらには奥州の藤原氏を滅ぼし、建久3年(1192)征夷大將軍に任ぜられた。記録によるとこの像は、神護寺仙洞院に、今は失われた後白河法

皇を中心とする諸肖像のうち、『伝平重盛像』と対向して安置されていたという。いずれも似絵(にせえ)の名手であった藤原隆信の筆と伝えるが、それぞれ画風のニュアンスは相違している。鎌倉時代。掛幅装。絹本着色。縦141.5cm 横112.0cm／京都府・神護寺





9 「函量所」(『地獄草紙』部分)——平家の時代には、末法到来の余波を受けて、不安な世情や現実のはかなさを通じて、六道輪廻の観念が普及した。六道とは、地獄・餓鬼・畜生・阿修羅・人・天の諸道をさす。業因によって、一切の衆生は善悪のあいだをさま迷いめぐるのである。『平家物語』の中にも、六道の思想は「灌頂の巻」の後白河法皇と建礼門院とのあいだにかわされている。地獄は六道の中でもその最たるものであった。本図は、生前に計量の不正をおこなった男女が、鉄火の苦業にあえぐさまを描いたもの。平安末期。卷子装1巻。紙本着色。縦26.5cm/奈良国立博物館



8 大仏殿炎上(『東大寺大仏縁起』部分)——僧兵の反抗を鎮めるため、治承4年(1180)暮れ、平重衡(しげひら)は奈良に出陣した。民家に火を放ったところ、折からの風で東大寺・興福寺も炎上した。大仏殿の階上には、老僧・修学者・子供ら千余人が逃げてきたが、猛火に包まれ、さながらの焦熱地獄を現出した。『東大寺大仏縁起』は戦国時代、天文5年(1536)の成立。業火の恐ろしさを生々しく描いている。卷子装。紙本着色。縦35.3cm/奈良県・東大寺